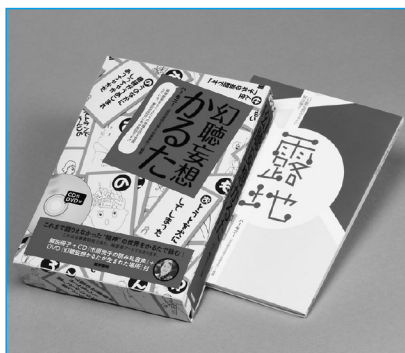




幻聴妄想かるた

編著：ハーモニー／医学書院

定価：2,415 円(本体 2,300 円＋税)／TEL：03-3817-5657

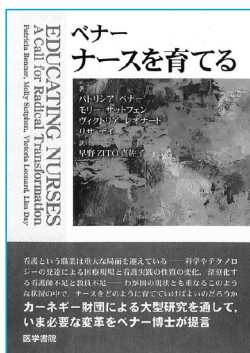
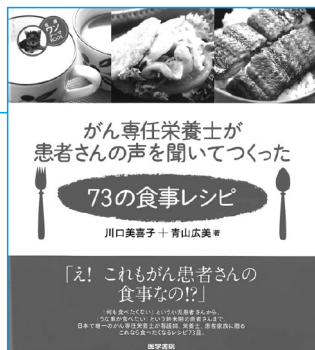
■精神障害をもつ人たちが、「かるた」という遊び道具で自らの幻聴・妄想の世界を伝える。作者たちが日常を送る就労継続支援 B 型事業所・ハーモニー(東京都世田谷区)を紹介する DVD と解説冊子「露地」、女優市原悦子さんが読み上げる音声の CD つき。「地域で暮らす」イメージをつくることで、退院支援のあり方が見えてくる。精神看護実習の教材にも、心理教育のツールにも活用したい。

がん専任栄養士が患者さんの声を聞いてつくった 73 の食事レシピ

著：川口美喜子・青山広美／医学書院

定価：1,890 円(本体 1,800 円＋税)／TEL：03-3817-5657

■「食べられない」がん患者さんたちのために、日本で唯一ともいえる「がん専任栄養士」が工夫をこらした 73 の食事レシピ。それぞれのレシピが生まれたときの「story」がクリップされて、どのようなときに、どのような工夫がなされたのかが語られる。「食べられない」患者さん・利用者さんをもつ看護師、栄養士、家族へのギフトにも。命を支え、心を支えるために。



ベナーナースを育てる

著：P. ベナー他／訳：早野 ZITO 真佐子／医学書院

定価：4,200 円(本体 4,000 円＋税)／TEL：03-3817-5657

■日本に多くのファンをもつベナー博士が、カーネギー財団の大型研究の成果をまとめた大著。共同研究者とともに、医療界の変革を担うのは看護師以外にはないと呼びかける。そのための人づくりの重要性に焦点を当て、学生、後輩を「よいナース」に育てるために、優れた実践教育のあり方を紹介し、対話、議論、自己評価等に多くの視点を提供する。臨床と基礎教育をつなぐ実践教育を描く。

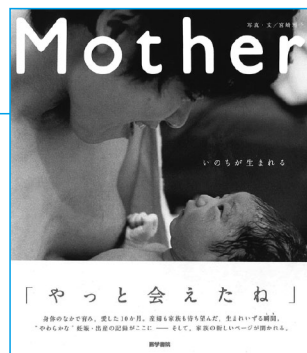
Mother

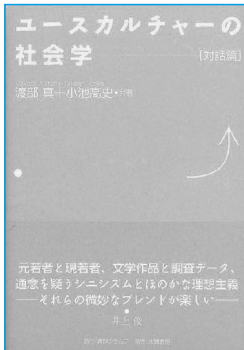
いのちが生まれる

写真・文：宮崎雅子／医学書院

定価：2,730 円(本体 2,600 円＋税)／TEL：03-3817-5657

■『産婦雑誌』に「いのちのささやき」を連載中の著者は、いのちの生まれる瞬間(とき)を撮って 25 年。1 枚いちまいの作品に宿るいのちの輝きは、そこに関わる助産師の存在の確かさを私たちに伝える。今、注目を浴びる漢字「絆」。母と子をつなぐ脐の緒はその原点。「出産は 土の匂いや 潮の匂いを 懐かしく思い起こさせてくれる 女たちの身体の中にある 聖なる自然よ 永遠にあれ」(本文より)。





ユースカルチャーの社会学 [対話篇]

著：渡部真・小池高史／書肆クラルテ

定価：1,995 円(本体 1,900 円＋税)／TEL：06-6323-3297

■本誌連載の「続・ユースカルチャー」「映画のなかのユースカルチャー」から、21 世紀に入ってからの日本の若者に顕著なトピックを抜粋し、2011 年に行った対談を加えている。50 代大学教員の渡部氏(元若者)が、ユースカルチャーの担い手である大学院生小池氏(現若者)を対談相手に得て、類書にはない、リアルで多面的な若者文化論がダイナミックに展開される。

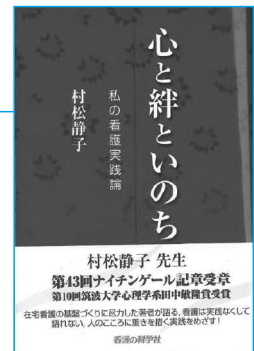
心と絆といのち

私の看護実践論

著：村松静子／看護の科学社

定価：1,260 円(本体 1,200 円＋税)／TEL：03-3943-0244

■日本で初めて看護サービスの事業化に取り組み、より質の高い看護を探究し、訪問看護を実践してきた著者の、看護の原点が綴られたエッセイ集。雑誌連載から十余年経過しても、その看護に対する思い、患者に向き合う姿勢、目指す方向の確かさは変わらない。その時々、看護師・村松静子が何を選び、何を学び、何を発信してきたのか、いきいきと語られる。まさしく「看護実践論」!



メンタルケア専門ナースが教える 「相手の心を開く」ビジネスコミュニケーション術

監修：日本精神科看護技術協会／リットーミュージック

定価：1,365 円(本体 1,300 円＋税)／TEL：03-5213-9296

■看護師の書いたビジネス書!「看護ノウハウに学ぶ、聞き方、伝え方、話し方。」(本書帯より)。病棟や外来で、時間もなく、偉そうに思える医師には言えなくても、看護師になら本音が言えるという患者や家族は多い。なかでも精神科の看護師は、一般診療科の看護師に比べて患者とのコミュニケーションに多くの時間を割いている。その「相手の心を開く」技術を、ベテラン 4 人の看護師が伝える。

在宅ホスピス物語

死と生に向き合うとき

著：二ノ坂保喜／青海社

定価：1,890 円(本体 1,800 円＋税)／TEL：03-5832-6171

■ホスピスが導入され、主に末期がん患者を対象とする緩和ケア病棟が増え、日本の終末期医療は少しずつ変化をとげてきた。日本の「ホスピス」のあり方に違和感をもち続けた、著者独自の「在宅ホスピス」論。「在宅では患者を病気によって区別しない」「(あとがきより)。これこそ医療のあり方の本質であり、目指すところは「包括的緩和ケア」の実現。世の中が、ようやく彼に追いついてきた。

